

「語りの構造」分析における〈時間〉概念に関する覚書き

松 本 修

プロローグ

読者論の浸透により、文学テキストを読む読み手の働きがクロージアップされ、読者の読みを発動させるテキストとの関わり方の機制が改めて問題にされるようになってきている。この機制を「語りの構造」と呼んでおくが、この機制はテキスト側から提示される約束事としての枠組みであると同時に、そこからの読者の読みの自由を基礎付けるものでもある。この両義的な性格のために、テキスト側の枠組みを重視するか、読者側の自由を重視するかという一種の対立が生まれる。

たとえば、国語教育の世界では、ジェラルド・ジュネットやフランク・シュタンツェルのナラトロロジー（物語学）の見地を取り入れて、「語りの構造」を説明しようという方向がある。山本茂喜は、国語教育の領域における議論の錯綜を解く鍵としてその導入をはかっている⁽¹⁾。私自身も同じ立場に立ち、いくつかの研究を発表した⁽²⁾。山本の研究には、テキスト構造を固定的にとらえている印象は少ないものの、ナラトロロジーの幾つかの概念が議論の対立点あるいは錯誤点を炙り出す切り札となっている観があり、そこが読者側の自由を封じて固定的な解釈を導くような印象を与えかねないものとなっている。一方、文学理論としてのナラトロロジーは、テキストに関与する読者とテキストとの関わり方を理論付けようという

ものであり、本来読者の自由を制限しようという意図下にあるものではない。気をつけなければならないのは、議論の錯綜を解く打ち出の小槌にしてはならないことであり、それによってナラトロロジー自体が、正しい解釈を導く解釈装置になってしまうことである。そうならないために、ナラトロロジーの概念を、必要な範囲において整理統合することが今後必要となろう。国語教育分野でナラトロロジーへの言及が少ないのは、その概念があまりに精緻すぎて、実際の自在な教材分析に適したものとなっていない、という実情によるものと思われる。

また、文学における「語り論」は、すでに文学研究の一領域をなすものでありながら、その影響が「源氏物語」などを除いてほとんど国語教育の世界に及んでいなかった。ところが、小森陽一の独自の語り論⁽³⁾、三谷邦明らの「言説分析」⁽⁴⁾によって、国語教育に世界にも、教材研究の前提理論ないし方法として具体的影響力を持つ状況が生まれつつある。このうち、小森の議論は、主として読者の自由に理論的根拠を与えるものと受け止められており、一方三谷らの試みは、教材研究の厳密な方法として受け止められているようである。三谷らの「言説分析」という用語は、語用論領域のディスコース・アナリシス（談話分析）と分けたものである。しかし、たとえば「山月記」の分析を見る限り、かなり恣意的な読みに強引に根拠を与えるようなものとなる可能性もあり、読者の自由をテク

スト構造に無理に重ねるようなものともなりかねない。この点では、語用論領域での虚構テキスト分析の精密さにさらに学ぶべきであり、それを欠いたまま国語教育における教材研究に適用することは危険をはらんでいる。

語用論領域における「話法」研究の成果⁽⁵⁾を、文学研究におけるナラトロジーの研究の成果と結び付け、国語教育における教材分析の道具だてとしようという方向が最も穏当なものと思われるが、語用論領域の成果が持つ精緻な分析の装置、たとえば「自由間接話法」(描出話法)を認定するための様々な指標を、どのように簡略に示すことができるかという課題がある。これはナラトロジーの援用における課題と共通のものである。そして、この分野においても、先に示した対立が見受けられる。たとえば、中村哲也は、文学教材を読む上での「文学言語」の独自性・特殊性へ配慮すべき観点として「話法」「語りの技法」をあげ、特に「自由間接話法」の重要性に言及しているが⁽⁶⁾、その狙いは、文学教材の読みの「情景・心情」重視からの転換とともに文学教材の解釈の手續きの確定にあるようであり、テキスト側の枠組みの重視に力点がかかっている。しかし、野村真木夫は、「描出の範疇は読者によって産出され、描写などとの境界が作り出される」「描出は読者のテキストへの参加が条件となる」「テキストの部分を描出と判定するとき、その範囲は読みとりかたに応じて決まる」と指摘しており⁽⁷⁾、いわゆる話法の分析が、読者主体の「読み方」に大きく依存するものであることを明らかにしている。

このような、テキストか読者かという対立は、もちろん、どちらかに偏った結論には落ち着かないものであり、相互の関わり方の関係を明らかにする形で決着すべきものであろう。そのための検討に

おいて、最も尖鋭かつ微妙にこの「調整」のための概念になりそうなのが、「時間」である。

「時間」概念の諸層

なぜ「時間」概念が最も尖鋭かつ微妙に「語りの構造」分析に関わるかといえは、その理由は次のように略述できよう。

第一に、「語りの構造」を基礎付ける様々な要因のうち、空間構造にかかわる部分については、たとえば「視点」概念などを媒介としてその分析、記述の形がかなり一般に受け入れられてきているが、「時間」にかかわる分析、記述の形は、リクルの哲学的基礎付け⁽⁸⁾、ジュネットの分析方法の提示⁽⁹⁾などがあるものの、空間構造ほどわかりやすいものではないため、一般に受け入れられているとは言えず、いまだ時間にかかわる分析は方法としての尖鋭さをもっている。

第二に、「時間」は、語りの主体に緊密に拘束される性質を持つため、「語りの構造」を基礎付ける「語り手」像の形成に最も強力かつ微妙に関係する概念である。語り手と文章との距離、語り手と物語内容との距離がここに集約的にあらわれる。

第三に、なぜ時間にかかわる側面がわかりにくいかということにかかわるが、「時間」が語り手主体に緊密に拘束されるとは言え、その拘束のありようを分析するのは読み手にほかならず、いわば読み手の主観によって「時間」の内実はいかようにも変質しうるといふ微妙さを持つ、ということ。空間のイメージは、具体的にたとえば図示したりして確認することもできるが、時間のイメージにはそのような外在化をとまぬ確認は、季節感などをのぞけば、むしろか

しい。

このような困難を承知の上で、現在までの成果を踏まえて、「時間」にかかわる構造分析の方向の見取り図をまとめておきたい。

「時間」にかかわるもつとも尖鋭な領域、「読者の時間」についてのミシェル・ピカール『時間を読む』の⁽⁸⁾ 訳者、寺田光徳は次のように言っている。

……〈読み手〉と〈読むもの〉を分離・独立させて、とりわけ〈読み手〉に文学研究の「読者論」や言語学における「語用論」の最近の成果を取り込めるような役割を付与し得たことが彼の読書論や時間論の独創性の基になっていると言えるだろう。ちなみに時間を論じた文学研究にはブーレの主題論、ジュネットの説話論の領域からのアプローチがあったのだが、もしもピカールの時間論にもここまでのごとび遊びにならって第三の領域を想定するなら読書論ないし受容論となるだろう。ともかく〈読み手〉に今後の「読者論」、「語用論」、「読書論（受容論）」と連動する将来の可能性を託すことと、ピカールの所論に三極化の論理構造という特色を指摘しておくことで、『時間を読む』の紹介をひとまず終えておこう。⁽⁹⁾

寺田によれば、ピカールの設定した〈読まれるもの〉〈読むもの〉〈読み手〉という三極は、作家（論）・作品（論）・読者（論）、あるいは、意味論（セマンティック）・記号論（セミオティック）・語用論（プラグマティック）という三極と重ねられるのだという。その上で右の発言があるわけであるが、この論に従えば、「時間」の枠組みにも、「作者の時間」ないし「物語内容の時間」、「語りの

時間」ないし「テキストの時間」、そして「読者の時間」という三つのレベルを分けて考えることができるだろう。実際、リクール、ジュネット、ピカールのそれぞれの考察は、この三つのレベルの相互の関わりについて、それぞれの重点を持ちながら展開されているように思われる。

このうち第一の「作者の時間」ないし「物語内容の時間」に重点がかかれば、リクールのように哲学的な指向、時間・歴史にかかわる精神分析的とも言える指向がおもてだつことになる。人間の物語る行為がいかにして時間というものとかわるのか、ということが重要な問題になるからだ。言語哲学的関心から、私は、言語と時間とが双生児のごとき同時発生的な事態であり概念であることを論じたことがあるが⁽¹⁰⁾、物語る行為は、さらにそのようにして生まれた時間を組織付ける行為であるからだ。この組織付け方の様式を整理する一種の時間論的ジャンル論、そこからもたらされる暗黙のメッセージをさぐる時間論的物語論・時間論的神話学が構想されよう。

第二の「語りの時間」ないし「テキストの時間」の問題が、現在の時間に関する議論の中心を占めるものであり、ジュネットの論じたのもこの点である。この領域は時間以外にかかわる語りの機制全体と関わって論じられ、いわゆるナラトロジーの一領域をなす。この領域は、第一の「作者の時間」ないし「物語内容の時間」との関係において、単なる物語内部の問題か、語り手を経由して作者およびその意図と関わる問題に還元されるか、という議論に結び付く。だから、リクールはジュネットの業績に対して次のような問題を設定し、検討を加えた。

ジュネットによって提起された議論と解釈をこえて問題となるのは、作品の意味するところを保持するためには、テキストを、それ自身をこえて経験のほうへ、たしかに見かけの経験ではあるが、時間との単なる戯れに還元してしまうことはできない経験のほうへともたらず意図に、物語技法を従属させるべきでないかどうかを知ることである。(11)

リクルは三つの物語の分析を通して、物語制作における時間の問題だけではなく、物語の虚構が経験そのものを形作るという意味においてテキストの外部にかかわるというようなことを示している。もちろん、このような外部へと開く読みを、文学の境界を逸脱するものだとして排除するストイックな態度もあり得よう。ただ、最初に触れたように、時間という概念は極めて感性的な実感に支えられざるを得ず、しかも時間についての議論はそのような実感をもとに展開されることになるわけだから、テキスト没我論的な態度にも限界はあろう。それに、第三の「読者の時間」との関わりにおいて、ふたたびテキストの外部との関わりが問われることになる。

ピカールの試みは、第三の「読者の時間」を組上に乗せたものであったわけだが、十分な成果を上げたわけではない。それは、寺田が、既にみたように「ともかく〈読み手〉に今後の「読者論」、「語用論」、「読書論（受容論）」と連動する将来の可能性を託すことと、ピカールの所論に三極化の論理構造という特色を指摘しておく」というような言い回しをとった所以である。この領域が難しいのは、観念上の読者を設定しても、具体的な読みの場面においては、「私」という生身の読者が立ち現れてしまうからだ。たとえば私が最近試みているダイクシス分析について見てみよう(12)。これは分類とし

ては、第二の「語りの時間」ないし「テキストの時間」の問題に属する。「場のダイクシス」についてはかなり固定的にテキスト内にとどまつて物語場面の構造を読み取ることができよう。これは空間という概念・空間認識が視覚に支えられて、ある程度尺度が判然としていることに対応する。「人のダイクシス」については、登場人物についてはある程度確定することができそうだが、語り手についてはそうではない。語り手がどの立場から、誰の声で（自由間接話法は語り手の声と登場人物の声が二重にかさなっているのだという説明がなされることになる。「話法」はその名もヴォイスである）語っているのか、誰に語り手が近付いているのか、は、読み手の主観によつてかなり異なる側面があり、異なるそれぞれの読みを説明する要素が同じテキストの中にそれぞれ存在し得るからだ。「時のダイクシス」にいたっては、ますますそうであろう。たとえば、工藤真由美は、「時間副詞」をダイクティック（絶対的）なものとは非ダイクティック（相対的）なもの（基準となる時点が明示されないもの）とに分類しているが(13)、工藤のあげるダイクティックな副詞、「その朝」などの例を考えると、テキスト内に根拠がない場合には読者の自由な時間が想定されることになるし、根拠が複数あれば読者によつて分かれることになりうる。さらに工藤の言うダイクティックなものについても、「あの頃」などについては同じようなことが言えよう。さらに、副詞にかぎらず、「しばらくたって」というような時間表現について考えれば、「時間」が感性的なものに支えられるということによつて、読者によつてその実感が大きくわかれる可能性もあるわけである。

エピソード 時間分析の可能性

こうしてみると、時間にかかわる分析の持つ可能性が逆に照射される。つまり、「時間」が読者に依存する度合いの高い微妙なものである分だけ、「時間」のかかわる読みが、テクストの読み全体を分ける鍵になっている可能性がある、ということである。たとえば空間的な概念とも言える「視点」が、「語り」という概念によって補完されなければ有効なものとならないのと同じように、「語り」の分析の分岐点は「時間」の読みの差異を説明することによって判然とするようなことが起こりうる。それは、作者側におけるテクストの外部があるのと同様、読者側におけるテクストの外部があり、その読者側の外部との連結点を見出だすことで、読者それぞれの読みを基礎付け、互いの読みを対置させつつ自らの読みを相対化してのり超えていくという新しい読者論的な読み・授業のポイントとなる可能性をも示唆する。

本来ならこの点から、従来ある「時間」にかかわる研究の方法を一瞥し、それぞれの特色を明らかにしつつ国語教育における「時間」概念の有効性に直接言及すべきところであるが、それは今後の課題として、これを「覚書き」としておきたい。

注

1 山本 茂喜 「「ごんぎつね」の視点と語り」『人文科教育研究』22 人文科教育学会 一九九五

「冬景色」における視点人物と語り手——「冬景色論争」と西郷視点論——『国語教育研究の現代』

2 松本 修 「『ロラン・バルトのナラトロジーにおける方法と姿勢』」『宇大国語論究』創刊号 宇都宮大学国語教育学会 一九八九

「城のある町にて」における〈時間〉——描写と「語り」——『宇大国語論究』2 宇都宮大学国語教育学会 一九九〇

「檸檬」における〈時間〉という方法——「瀬山の話」から「檸檬」へ——『宇大国語論究』3 宇都宮大学国語教育学会 一九九一

3 小森 陽一 「舞姫」における叙述の場」『宇大国語論究』6 宇都宮大学国語教育学会 一九九四

4 三谷 邦明 「出来事としての読むこと」東京大学出版会 一九九六

編『近代小説の〈語り〉と〈言説〉』有精堂 一九九六

5 工藤真由美 「中島敦『山月記』の虚構構造——言説分析の視点から——」『日本文学』45—7 一九九六

「小説の地の文のテンポラリティー」『ことばの科学』6 むぎ書房 一九九三

野村真木夫 「描出——テクストの研究にかかわる一つの問題提起——」『国語研究』第10号 上越教育大学国語教育学会 一九九六

6 ポール・リクール 久米博 訳 「時間と物語」I・II・III 新曜社 一九八七・一九八八・一九九〇

7 ジェラルド・ジュネット 花輪光・和泉涼一 訳 『物語の』

デイスクール―方法論の試み』 書肆 風の薔薇
一九八五

8 ミシエル・ピカル 寺田光徳 訳 『時間を読む』 法政大
学出版局 一九九五

9 ミシエル・ピカル 前掲 二四七―二四八頁

10 松本 修 「言語記号の恣意性における〈時間〉の問題」『人
文科教育研究』22 人文科教育学会 二二五―二二
二頁

11 ポール・リクール 久米博 訳 『時間と物語Ⅱ』 新曜社
一九八八 一四九頁

12 松本 修 「青森挽歌」における場のダイクシス」『Groupe
Bricolage 紀要 NO.13』Groupe Bricolage 一九九
五 一―十一頁

「物語における〈人のダイクシス〉の分析例―「源
氏物語」浮舟巻の一節を材料に―」『瀧苑第三二号』
栃木県立宇都宮高等学校 一九九六 六九―七六頁
「『永訣の朝』におけるダイクシス―「語りの構造」
理解のために―」『新しい国語教育の基層―長尾
高明先生華甲記念論集』 長尾高明先生華甲記念論
集刊行会 一九九六 一一七―一二二頁

13 工藤真由美 「小説の地の文のテンポラリティー」『ことば
の科学6』 むぎ書房 一九九三

(まつもと おさむ 上越教育大学)

不手際により、注番号の6・7に重なりが生じ、3頁上段の注6
・7が欠けました。補足して訂正します。

3頁上段 注

6 中村哲也 「国語教材研究への文体論的アプローチ―文学教
材における〈自由間接話法〉の諸相―」 一九九

六年第九十回全国大学国語教育学会発表資料

7 野村真木夫 前掲論文